和玉篇雜攷

岡田希雄

一

和玉篇類に關する自分の調査は「慶長版倭玉篇版種攷」（本誌昭和九年一月號）「慶長十五年版倭玉篇の版種」（本誌九年二月三月兩號）「慶長十八年版倭玉篇」（執筆八年十二月）一日稿「中田博士本長享和玉篇と玄順本玉篇」（本誌九年五月九月兩號）等の中に記述したが、本誌昭和十年一・二兩月號に出した「支那撰述部首分類字書史概說」未完の中でも、原本玉篇や大廣益會玉篇、龍龕手鑑の條で、必要に應じて記述した。ところで自分が慶長版倭玉篇版種攷を發表するに先立つ事二十日の八年十二月十日には、岡井博士の學位論文「玉篇の研究」が刊行せられ、其れと、拙稿の發表とに因みて、川瀨氏の「倭玉篇に關する二三の所見」が九年二月の書誌學に出て、安田文庫の「弘治貳年霜月吉日」書寫の和玉篇（和玉篇集ともある）三卷三本、古活字本和玉篇三卷三本（自分が龍龕手鑑式活字和玉篇、略して龍活和玉篇と呼ぶ物）を紹介せられ、又慶長十六年版倭玉篇と云ふものに關する訂正もあつた。そして是れに因みて、書誌學六月號には、中島仁之助氏が、慶長十五年版の丁附混亂本を紹介せられた（此の本の事は後に言及する）七月號には川瀨氏が書誌學で安田文庫の龍活和玉篇につき又說かれ（但し一頁足らず）十月號では川瀨氏が、彰考館所藏の龍活和玉篇が安田文庫本と異る版である事に氣づき、同時に大槪家本と安田文庫本とが同種活字の異版である事をはじめて指摘せられた。龍

活和玉篇に二版ある事は、自分が、西山堂の舊刻書目によつて慶長版倭玉篇版種攷の中で注意して置いた事であり、五月の晦日に屆いた弘文莊待賈古書目第三號掲載の零本下卷(五段本)の寫眞と中島翁御所藏の零本下卷(四段本)との比較によりて認知する事もできたのであるが、川瀨氏の文により、三種ある事を知り痛く喜んだのであつた。(安田家の五段本は昭和十年五月の善本影譜甲戌第五輯中に、寫眞二葉が收められて居る。それと「玉篇の研究」に見える大槻家本の寫眞とを比べると、兩者が同種活字の異版である事は明らかに認められる。[註]弘文莊本と大槻本とは同版であるとの事だから、龍活和玉篇は、三種の異版が完全に存在して居るのである。喜ぶ可き事である)

註、川瀨氏後に訂正す、後文參照

「玉篇の研究」に就いては、かねゞ〳〵岡井博士より紹介せよとの御慫慂を受けて居たので、三月初旬に至りて漸く一本を得て、其の紹介文を國語國文の五月號に出した。其れには非禮乍らも批判がましい言もあつたので、博士は「玉篇の研究補正」の中で種々教示せられるところがあつた。此の補正は、つい最近卽ち今年の十一月十五日の刊行である「柿堂存稿」中に收められて居る。菊版二十七頁分のものである。なほ博士は昨九年九月刊行の日本漢字學史の中でも、和玉篇の一項を設けて居られる。但し一頁餘のものである。(註、今年と云ふのは昭和十年のこと)

さて以上が、和玉篇に關する最近の研究の全部であるが、諸家の御發表により非蛙にとりては得るところが尠くは無かつた。其の主要なものとして是非記す可きは、無刊所異版と丁附混亂本との事である。

二

自分は慶長十五年版倭玉篇として二版三種を指摘したが、是れ以外に、なほも一つの異版が存したのであつた。其の本は岡井博士が「玉篇の研究」三九五頁にて紹介せられたものである。內閣文庫所藏本(第一六六七九號)にして、同

じ内閣文庫所藏の十五年版無刊所本（番號は第二六六八〇號）と對比せられた博士は、二者の相異點につき、版心の所が復行と成つて居るか單行と成つて居るかと云ふ相異、匡廓の高さの相異、文字の相異を指摘せられた。そして文字の相異としては、部首卅の「貢」を、此の異版が×丁の下に貝と書いた字に作つて居る事を指摘せられたのであるが、斯う云ふ相異がある以上は、明らかに無刊所本とは異るものである。本文の訓註に於いて何程の相異があるか、其の本の版下本と成つたものが、何れの版であつたか、其の本と無刊所本との前後は何うであるか、又後の十八年本との關係は何うかと云ふやうな事は、全く不明ではあるが、とにかく、無刊所本の中にも、眞の異版の存する事が判明したのを喜ぶと同時に、版種の多い事實から、倭玉篇の需要の多かつた事を一層明確に認識し得て驚くのである。さて此の本の事、無刊所本と區別する爲めに「無刊所異版本」とでも稱する事にしたい。

三

十五年有刊所本が、初刊本と同じ版木の後刷本であり、たゞ刊記の所に入木で二王門町云々と云ふ刊行所を陰刻したものであるに過ぎない事は、自分の指摘した事であるが、其の初刊本に奇妙な本のある事も判つた。其れは、垂水の中島仁之助翁が「書誌學」二月號に出た川瀨氏の「倭玉篇に關する二三の新見」の記事に因んで、同誌の六月號の「垂水通信」の中で、二十五字詰十行の短文で紹介せられた同氏御所藏本であつて、此の記事を見た自分は、早速拜見させて頂たが、いかにも奇妙な本であつた。と云ふのは、此の本（丹表紙三冊本、但し表紙は後につけたもの）は、下卷のみの丁附が、卷尾の方に於いて甚だしく混亂して居るのであつて、五十五丁以後は

55
55
55
56
59
59
59
50
62
63
63
64
65
66
67
69
69
71

と成つて居る。しかも是れは、たゞ丁附が斯くの如く亂れて居ると云ふだけであつて、本文に於いては、他のあらゆる慶長版倭玉篇と一致して居り、何の混亂も無いのである。しかして、此の本――便宜上「丁附混亂本」と呼ぶ事とする――は、其の版種から云へば確かに初刊本・有刊所本と同版なのであり、摺りは甚だ佳良である（中島翁は、慶長版倭玉篇として、此の丁附混亂本と、有刊所本（仁王門町云々の所が入木である事は明かに認められる本）と、十八年單刊記本（摺刷甚だ佳良）との三種を所藏して居られ、自分は其れらや、自分の持參した有刊所本や無刊所本やで翁と共に對比したのであるが、此の丁附混亂本が有刊所本と同版で無いと云ふ證據は遂に發見できなかつたのである）。たゞし中卷だけは、文字が小さいやうで、やゝ感じが他の上下二卷と異るので奇異に考へたが、是れは、此の卷だけが、十八年の單刊記本の後摺本を取り合はせて足してあるからである事が判つたのである。とにかく此の丁附混亂本は（混亂の無い卷は姑く無視する）何う考へても奇妙な本であり何故混亂して居るかゞ全く判らない。しかして、丁附のある本に於いては、後に入木によりて丁附を變更する場合に正しい丁附をわざ〳〵混亂せしめると云ふ事は常識上考へられないから、此の本の場合に於ても、丁附混亂本が先きに發賣せられ、其の後に至りて丁附を訂正した本が出たと解釋したい。こゝで問題と成るのは、自分の眼福を得て居た唯一の初刊本たる角正方氏御所藏本と、此の丁附混亂本との關係であるが、斯う云ふ混亂本の存する事が判つた以上は、角氏本も或ひは混亂本では無かつたか、其れを自分は氣が附かなかつたのでは無かつたか、と云ふ疑念が生じたので、念の爲めに角氏にお尋ねしたところ、丁附に混亂無し、落丁なども無し、との御返書を頂いたのである。して見ると角氏本と、中島翁本とを共に初刊本であると認める以上は、丁附に混亂ある中島翁本を前摺、混亂無き角氏本を後摺と見る可きではあるまいか。二者共に摺りは佳良である（因みに、此の混亂本の版心の所

が或ひは複行であり、或ひは單行である事は、無論、上卷同樣に、有刊所本と一致する)。

四

今年東京へ行つた時、帝大圖書館、國語研究室、東洋文庫等で慶長版倭玉篇を見せて頂いたが、初刊本、無刊所異版、雙刊記本などは見なかつた。古書即賣會に於いても久しい間注意して居るが其れらは見ない。

五

さて斯うして、丁附混亂本や、無刊所異版本が存する事が判明した以上、慶長版の版種は左の如く訂正せなければならない。

(一) 慶長十年正月の　東井叟本　未見、後の倭玉篇との關係も不明
(二) 慶長十五年二月の　丁附混亂本
(三) 同　初刊本
(四) 同　有刊所本(二王門町本)
(五) 同　無刊所本初刊本による飜刻ならん
(六) 同　無刊所異版本岡井博士指摘　未見
(七) 慶長十八年十一月の　雙刊記本　未見
(八) 同　單刊記本初刊本による飜刻か

(丁附混亂本・初刊本・有刊所本・無刊所本：此の三本は同版)

六

岡井博士の「玉篇の研究補正」は、私の文を二十五條程引かれた。私の言を認めて下さつたのも、然らざるものもあ

るが、とにかく、其のやうに、引いて頂いた事は私には光榮である。今「補正」を拜見したに就いて、更に必要な事どもを述べると左の如くである。

○補正二七八頁十一行。私は古訓玉篇と云ふ寫本三十卷、著者も時代も不詳のものを擧げたが（倭玉篇版種攷一六頁）博士は、是れを「玉篇の研究」三六四頁の寛永八年本の所へ入れて「姑くこゝに出す」と斷られた。しかし是れは何うか。古訓玉篇は高田與清の松屋叢考の引用書目に「三十卷、古寫本」とあり、本文の「いぬ、ゐのこ」の條に「古訓玉篇ノ十三の卷ノ草ノ部には、莠、余受ノ切、ハグサ、ヒツヂ、イノコグサとも見ゆ」（隨筆大成本六七五頁）とあるものにて、草部が第十三卷である事、反切も見える事、三十卷である事から、是れが會玉篇と大體似たものであつた事が判るのである（木版本會玉篇附訓本では十三の五左六「余受切、草也、ヒエ、ハグサ」とある）。しかも擁書樓の富を誇つた與清は、古寫本と明言して居るのだから、先づ慶長頃、又は其れ以前の寫本であらう、寛永八年版の如き版本を寫したものでは無かつただらう、假りに寛永頃の寫本であるにしても、其の撰述は古かつたのでは無いか、と想像せられるのである。故に自分は此の本を以て室町期のものとして置いたのであり、博士が姑く寛永八年版の所へ入れられる事をも否定したいのである。同時に博士が、彰考館所藏の與清獻上の龍龕手鑑式活字和玉篇三卷三本に關して、これが「古訓玉篇寫本三十卷……であれば都合がよいが……」（補正二八二頁）と云はれた事も不當であると云はんとするのである。さて此の古訓玉篇は、與清の所藏であつたか何うかは判らぬ。書名だけならば、黑川春村の音韻考證卷第一の風字の所（一六右）にも見える。此の書、轉寫本でも可いから一見したいと思ひて、圖書館や文庫で、又其の目錄で探して居るが、未だ所在を突き止める事ができない。

○補正二七八頁十六行。私は「寛永八年辛未季秋吉旦新刊」と、二行の刊記ある附訓會玉篇に關して、此の刊記が埋木によりて加へてあるものと、然らざるもの（卽ち埋木の刊記ある本を冠彫にて再刻した本）との二本がある事を述べ、附訓本の刊行は寛永八年季秋以前であらうと推定したが（倭玉篇版種攷一五頁）博士は「埋木（ウヅキ）」と「入木（イレキ）」とは違ふものとして敎示せられるところがある。私は埋木と入木との間にさう云ふ意味の相違があるか何うかを知らなかつたので、「版木の一部に新に木を埋め込んで、其れに新しく文句を彫刻する事（場合によつては、彫刻せずに、黑く摺り上げられるが儘に放置する事）」の義に、埋木・入木の兩語を使用し、何ら區別せなかつたのである。若し、博士の御言葉の如く使ひ分けせなければならないのであるならば、無論、向後は謹んで御言葉に從ふ所存である。其の言葉の事はともあれ、私が、寛永八年版に二種ある事を云うたのは、此の本には、

（イ）刊記の二行分の上下の廓線が、他の廓線と連續せずして、截然と區別がありて、其れは、入木によりて刊記をはめ込んだのだと見られる本（私の見るは京大圖書館の本である昭和七年一月、龜田氏が傭された倭玉篇展覽會に出陳せられた本も入木本であつた）

（ロ）刊記の頁の上下の廓線が、明白に連續して居て、刊記が入木である事を想像させる餘地の無い本（私が見る事できたのは杉浦丘園氏御所藏本であり、私は京大本と並べて檢したのであつた。中島仁之助翁も非入木本を所藏して居られる。恐らく同版であらう）。

の二種が存するからである。所で此の二種の本、これを突き合はせて比較すると明らかに本文は異版であり、其の關係は冠彫である。しかも刊記の文句は同じであり乍ら、一方は入本本であり、他は非入木本である。一體冠彫的再刻が行はれる場合に、實際の再刻年月と一致するせぬは顧慮せずに、前の刊記を、其のまゝ彫刻する事のあるのは、すでに慶長十五年版倭玉篇で充分知つた事である。古版本には此の種のものは珍しく無い。川瀨氏の「誤られたる古版本」（書誌學昭和十年八月號）に擧げられた中にも例はある。增補せられた倭玉篇の最初の刊本と覺

しい寛永五年版にも、二種あつて、刊行年月は同じであつて、版は異つて居るのである。後文を參照せられたい。そして此の寛永八年本の場合は、正に其れに準ずべきであらう。で若し入木本を版下として非入木本を彫る場合ならば、入木本に寛永八年云々とあるから、其のまゝに彫刻する事はあり得る筈だ。そこで私は入木本が先きで、其の入木本を版下としたから非入木本が出たと見るのである。(反對に、非入木本を版下として入木本を作つたと見る場合には、「其の入木本の刊記は、今見る如き寛永八年云々と云ふので八年云々の刊記を加へたのだ」と見なければならなくなるが、斯う云ふ事情は、想像は出來ても私の主觀では、鑿說であるやうに感じる。其れで私としてはやはり入木本が先きに出來、其の再刻本が非入木本であると考へたい)。

とにかく、然う云ふ風に考へると、其の入木本の本(セト)の刊記は、(イ)寛永八年云々と云ふのでは無い他の文句であつたか、(ロ)若しくは、無刊記であつたかの何れかであつた筈であるが、何れにしても、其の入木が未だ行はれて居ないところの未入木本とも稱すべきものが存した事は確かにて、こゝに、所謂寛永八年本は

(一)　未入木本　もとの刊記は不詳、刊記の有無も不詳、刊年も不詳

(二)　入木本　「寛永八年辛未季秋吉日新刊」とあるもの、(一)の後摺本　同版

(三)　非入木本　右の入木本の冠彫本なれば刊記は同じ、刊行年月不詳　異版

の三種が存したのだと云ふ事になる。(二)の摺刷開始と(三)の其れとは、同時である筈は無い。同樣に又(一)と(二)とに於いても、同じ事が云ひ得る。其れで(二)の寛永八年季秋が其の入木本摺刷開始の時日であるとすると、(一)の摺刷は寛永八年九月以前で無ければならぬ。以上の如き事情にて、私は「刊記のところが埋木と成つて居るから、少くとも寛永八年秋以前には、附訓本の上梓が行はれた筈である」と云つたのである(とは云ふものゝ、入木本と非入

木本との先後は、一寸目を通したゞけでの推定であるから、或ひは事實は逆であるかも知れない。兩者を突き合はせて檢査し得る學者の示教を得たい)。

○寛永八年版會玉篇の版種の事を述べたのに因みて、是れに續く古い附訓本であつて博士が擧げられず、昭和七年一月の龜田氏の倭玉篇展覽會にも出なかつたものを擧げると、寛永十八年八月本がある。其の四周雙廓の刊記は

寛永辛巳仲秋吉日
書舍林甚右衞門刊

と云ふのであるが、此の刊記が亦入木である其の入木狀態は、寛永八年本のやうに入木であるからには、入木せない時の判りやすく說明をする事は出來ない本も存する筈であり、此の本にも、未入木本と入木本との二種がある譯である。本は無論例により寛永八年版などに比べると冠彫的に似た本である。

○補正二七九頁十三行。博士は、梅庸祚の字彙の體裁を襲うた大和田氣求の字集便覽十卷九本に關して「和字彙と題してある本を手にしたら、又考も異なつたらうに」と云はれたが、此の本、內題は字集便覽であるけれど、題箋は、龍谷大學所藏本も私の本も、まさしく「和字彙」と成つて居る。京大所藏本は書題箋であるがやはり和字彙である。和字彙と云ふ木版題箋の存するのが、承應の開版當時からの事であるか、書肆が後になつてやつたさかしらであるか、字集便覽と云ふ題箋の本もあるのか何うかは、知らないが、寛文や元祿の書目にもやはり和字彙として載錄せられて居るのである。博士の見られた本について御伺ひしたところ、龜田氏所藏本にして、題箋に和字彙とあつた事に氣がつかぬ位だから、題箋か無いか、又は和字彙とは無かつたのだらうとの事であつた。

○補正二八〇頁十四行。この意義分類體玉篇と云ふのは、安田家の玉篇要略集の系統に屬するものである事を、玉

篇の研究を讀んで知つたのであつた。（中田博士本長亨和玉篇と玄順本玉篇上一四頁）

○補正二八三頁七行。博士は、博士の指摘せられた內閣文庫所藏の無刊所本（私が無刊所異版本と呼ばうとするもの）と、私の所謂無刊所本との兩種の關係について「無刊所本に兩種あるのが、岡田君のいはゆる初刊本と無刊所本とに當るのだらうか、早く知りたいものだ」と云つて居られるが、無刊所異版本が初刊本とは異るものである事は、第二節で述べた通りである。

○補正二八三頁八行以下。慶長十五年の二王門町開板の有刊所本の刊記の最尾の文字は、何と讀む可きか判らず、私は是れを所與と讀む川瀨氏の說其の他の說を擧げたが（慶長版倭玉篇版種攷二六頁）弘文莊待賈古書目第五號に出て居る刊年不詳の聚分韻略附訓本の同種の刊記によつて、博士も「所與といふ名に讀むべく思はせられる」と云つて居られる。

○補正二八八頁七行。私が「玉篇の研究」の佚文中の部首の誤植例として、一四八頁に其れがある事を指摘したところ（岡井博士の大著玉篇の研究九四頁上段）博士は「頁數を云はれたのみで何部と指して無い」から「五百三十に毓字を收めた事だらうと忖度する」と云はれ、其れにつき辨じて居られるが、是れは全く見當違ひであり、私には毓字を問題とする程の見識は無い。私はただ會玉篇では第五百三十が×部（育字の上の四畫の形、音は徒骨切、又他骨切）と成つて居るのに、其れが此の佚文では士部と成つて居ると云ふ明らかな誤植を指摘したのであるに過ぎない。但し×が子字の倒置形で可いのであるならば誤植とする私の言は取り消さねばならぬ。（慶長版倭玉篇の部首第四百六十五もやはり×であり、康熙字典に於いても、丨部の士と厶部の×とは別字である。）

○因みに、誤植例では博士は補正して居られないが、三九四頁の夢梅本の識語に誤植がある。卽ち正しくは「斯玉

篇者以韻會禮部韻龍龕手鑑等……」とある可きものが「……以禮部韻會龍龕手鑑等……」と成つて居るのである。なほ誤植か何うかは知らぬが宋本玉篇卽ち會玉篇の字數が、八八頁には二二七八四字と見え乍ら、二〇五頁では二八九八九字と記してあるのも、門外漢には判りかねる事である。是正して頂きたく思ふ。

七

○玉篇の研究三九八頁に、寛永五年本倭玉篇の頂がありて、博士は實物を見られなかつたと見えて、龜田次郎氏の「和玉篇考」を引いて居られるが、其の奥書の文句にも誤植があつて、「今幾乎……」とある可きものが「今幾年……」と成つて居る。ところで此の本、龜田氏所引のものには、刊行所が見えないらしいが、別の本があつて、其れには右の楷書體七行分の奥書の次行に、草書にて「洛陽誓願寺下町」とある。しかして此の刊行所の字體は草書であるため、この七字は後で入木したので無いか（丁度慶長十五年版に於ける仁王門町本と同樣の事情である）と云ふ疑問も生じるが、其の刊行所無き本と突き合はせて比較して見ると、兩者は一寸見ると同じ版であるやうだが實は全く別種の版であつて、刊所無き本の方が字體細く概して版が良好であるやうである。何れか一方が他の冠彫である事は明らかだから、或ひは刊所無き本の方が前版では無からうか。但し此の版の前後は、本文の破壞狀態を精査したのでは無いから明言は出來ぬ。因みに私が親しく手に取りて見る事の出來た本は、中島翁の御藏本（刊所有る三册本（及び私の藏する下卷零本）、刊所無き上下二册の零本。他に中卷の零本があるが、刊所ある本の中卷とは同じで無いから、刊所無き本の中卷であらう。）である。私は倭玉篇の版種の考察には、中島翁の恩澤を蒙る事が多い。こゝに記して厚く御禮申上げる。

八

自分は日本化した玉篇として、玉篇の名を持つて居るものだけを擧げて、類字韻の如きは、わざと擧げなかつたが

慶長版倭玉篇版種攷一六頁是れもやはり、名に拘泥せず擧げる可きであつた川瀨氏（書誌學二の二）、岡井博士（玉篇の研究三九六頁）は擧げて居られる此の書は、松井博士御祕藏本も見せて頂いたけれど、其れを明治四十四年九月に影寫した東大國語學研究室の本で調査したのであるが、部首の種類も、數も、順序も、上中下三卷の卷數も、各卷所收の部首數も全く慶長版倭玉篇と一致する。本文は何うかと云ふに、一部首所屬の文字の數、順序は全く一致するものもあるが、大體は大同小異と云ふ可きである。訓註の種類と多寡も亦、全く一致するものが少しはあるが、やはり大同小異と云ふ可きである。漢文注は類字韻の方が豐富であり、此の點は特色と云へるであらう。しかし其れも、部首によつて、多寡は異る。とにかく斯う云ふ次第にて、慶長版倭玉篇と類字韻とは、酷似して居るから、必ず其の間に密接な關係が無ければならない。關係と云へば、類字韻より慶長の刊本倭玉篇が生れたか、刊本の倭玉篇を變形したのが類字韻であるか、と云ふ事であり、若し前者の如き關係であるとすれば甚だ面白い譯である。しかして赤堀氏の國語書目解題の如きは、松井博士本を「三百年以上の寫本」と云つて居るので、類字韻の古さも判り、兩者の先後と云ふ事は、愈々興味ある事と成るので、自分は、此の點を主眼として調査したところ、類字韻が版本倭玉篇よりも前のものであらうと云ふ推定は出來ず、逆に、版本から生れたのが類字韻であるらしいと認めたくなつた。自分は調査するに當り、兩者の訓註を材料とし、特に、慶長十五年の初刊本・無刊所本、慶長十八年の單刊記本の特色を示すやうな訓註が類字韻では何う成つて居るかを檢したところ、無刊所本や單刊記本に特有の訓註が類字韻にも存する事が判つたのである。例へば（丁附は倭玉篇のもの、初・無・單は其れ〳〵初刊本・無刊所本・單刊記本の略）

女上二三ウ七　タマヅサ。初・單タマヅサ、無クマヅサ

×（旁は莽篇は日）上三一 ウ四　カクス。初・單カクス、無カクフ

髓上五三 オ五　トヲル。初・單トヲル、無トラル

愚上六四 オ一　イヤシ。初・單イヤシ、無イカシ

×（心の上に青と交と左右に並べた形）上六一 オ二　マコヒ。單マコヒ、無マコレ、初マコトとあるべきにトに缺畫あり

×（ウの下に井）中二 オ七　イユ。初イエ、無イユ、單ノユ　壓滅によるか

橙中一三 オ二　タチバナ・ヤマタチバナ・ハユ。初にはタチバナ・ヤマタチバナ・ハナタチバナと三訓ある可きだが、ハナのナが缺畫により不明と成つたので、無ではハナタチバナの五字がハユと變した。單は正しくハナタチバナとある。類字韻は無本の如きに據りしか。若しくは類字韻と無本とは暗合か。

榮中一三 オ四　ハナサク。初・單ハナサク、無ハナサラ

果中一四 ウ二　ツメニ。初ツイニと有る可きもの、無ツノニ、單ツメニ

鬱中一七 オ五　ヲガツカナシ。初ヲボツカナシと有るべきもの、無ヲガツナナシ。單ヲガツカナシ

蔟中二一 オ六　アツマル。初・單アツマル、無スツマル

蔔中二一 ウ五　ヲ、子。初・單ヲ、子、無ヲ、子

×（敕の下に豆）中四三 オ六　マメガラ。初・單マメガラ、無マメガヲ

×（旁は其篇は豆）中四三 オ七　マメ。初・單マメ、無マノ、

剜中四七 ウ三　イワンヤ。初・單イワンヤ、無イウンヤ

彌中四七 ウ五　ヲ、イヤ。初・單ヲ、イヤ（やは也）、無ヲ、イヤ

斯中四八 ウ三　コシ。初・單コレ、無コシ

戩中四九オ　ホソシ。初・單ホソシ、無ホワシ
馨中五六オ七　ケヅル。初・單ケヅル、無ケグル
雅下三〇オ一　カモ。初・單カモ、無モ
勒下四六ウ二　キザス。初キザムと有るべきもの、單キザク、無キザス
緣下四八ウ七　フキ・モトヨシ。初・單フチ・モトヨシ、無、フキ、モトヨシ
×（旁は宇篇は衣）下五八オ一　カブレコロモ。初ヤブレコロモと有るべきもの、無・單カブレコロモ
×（旁は宗篇は巾）下五四ウ五　キヌ、。初・單キヌ、無キヌ、
繚下五〇オ一　イヨ〳〵。初・單イヨ〳〵、無イヨノ、
事下六〇オ七　ワザ。初・單ワザ、無ソサ
囲下六二ウ三　カタメ。初・單カタメ、無カタヌ

の如き例が存するのである。しかして無刊所本のみと一致するものもあると同時に、單刊記本のみと一致するものも存するので、何れか一方のみに據つたとは斷言出來ないが、誤字の襲踏と云ふ點では、單刊記本よりも無刊所本に近いやうに見受けられるのである。しかし又、十五年の無刊所異版や、十八年の雙刊記本は眼福を得て居ないのだから、其れらの中に、無刊所本の誤字や單刊記本の誤字を併はせ有するやうな本があつて、然う云ふ本から類字韻が生れたのでは無いかと云ふ疑ひもある。がともあれ、類字韻は慶長版倭玉篇に先行するものでは無くて、慶長版倭玉篇其れも初刊本で無い本、後の感心せぬ本から生れたものである事は認めて可いと思ふ。

刊本の倭玉篇がある以上は、其れに似たり寄つたりで、大した特長もあると認められぬ類字韻の如きをわざ〳〵作

る必要はあるまいと考へられるのに、類字韻の作者は、わざ〳〵類字韻を作つたのである。其の心情は理解できぬが、類字韻の存在は倭玉篇の勢力を知る一材料と成り得ると思ふ。

九

慶長版倭玉篇は美濃刊であるが、其れを半分の横本三冊に縮少し、しかも行數も段數も全く同じく、從つて丁數も亦全く同じくしたものであるのが龜田氏の所謂元和縮刷本である。偶然氣づいた事だが、上卷人部十五丁裏第五行第四字日の佇字は、すでに十四丁裏七行第四字に出て居り、重出すると云ふ理由からであらうが、此の元和本では省かれて居るので、從つて、其れ以後の人部所屬文字は一字づゝが、順に繰上げられて居る。無刊記であるため、何時の開版であるかは判らないのだが、一見して古版である事は認められるから、龜田氏は元和頃の開版と認定せられたのである。自分も岡井博士と同じく龜田氏の推定に從つて置く。

此の本で問題と成るのは、本文の良否は如何、本書が底本とした慶長版は何れであつたか、と云ふ二事である。先づ本文の良否如何に就て云ふと、是れを他の慶長版に比較するに、訓註の位置の相異（縱本か横本にするに就て、訓註か施すべき紙面が變化したので、位置を變へたものと認められるものもあるが、變へるにも及ばないと信ぜられるのに變へて居るのが大部分である）假名遣の相異（タヱズ・ソビエタリ・ヤハラクをタエズ・ソビエタリ・ヤワラクと變へて居る如き例）假名を漢字に變へて居る例（ヲ、イナリ、カスカナリなどのナリが也字の草體に變つて居る例が多い。紙面が縮小したからであらう）清・濁の相異（然の訓シカウシテをシカウジテと變へ、交のコロヲヒをコロヲビに變へて居る如き例）は本文の變化としては大した事でも無いから、捨てゝ置き、訓註の增減、破壞・訂正の二點を主眼として觀察し、任意に下卷の卷頭十三丁で調査すると訓註の增減の例としては

烘二ウ七　ヤク

×（无の下に烈火）二四オ　左旁の音註ケ

熟四七オ　ウム（此の訓は此の字としては重要なものである）

厭一二ウ一　ホル

×（广の中に來）　左旁の音註ライ

の如きは何れも元和本では脱落して居る。忽六オ二の左旁音註コツ、×（旁は予篇は黑）の左旁音註ヤは增加した例であるが、何れも誤りである（×は上與切でありヤの音は無い）。次ぎに本文の破壞と訂正とを見ると

大五二オ　慶ではヲホヒナリ・ヲホヒサとあるのが、元ではヲホイナリ・ヲヽヒナリと成つて居るのだから、元ではオホイナリの訓が二つ存する事と成つて居る。

×（壽の下に列火）一一三ウ　アタヽムとあるを元アメヽムと誤る。

炮七三ウ　キエヌを元キエタに誤る。

炮四六ウ　音チユツを元チユウに誤る。

黠六七オ　コガシコシ小賢の義、コザカシと同じを元本二行にコガシ・コシと變へて居るは誤りと云ふ可きだらう（コガシコシと一行に書きうる餘裕はあるのである）。

×（旁は竟篇は黑）六七オ　音註トクを元ナクに誤る。

嵎九六オ　ヲカを元ラカに誤る。

×（广の中に卑）一〇オ七　イヤシを元イカシに誤る。

麾一一ウ四　サシマネクを元ナシマネクに誤る。

×（广の下にロロ十ム重ぬ、厚と同じ）　音註コウを元コに誤る

高一三オ一　タケを元タチに誤る。

×（旁は甚）一三　音註チンを元ケンに誤る。
（篇は石）ウ二

の如き破壞例は多いが、慶長版に多い誤字を訂正して居る例とては全く無く、唯一つ、慶長版は萬オ七二の訓註としてツクルを何故か二度擧げて居るのを、元和本が一度に減じたと云ふ事實があるに過ぎない。

以上は、任意に下卷の十三丁分を材料としたのではあるが、一斑を以て全豹を推しても大過は無いと信じる。やはり元和版の本文は慶長版に比して、本文の惡い本であつたのである。從つて國語學徒が、初期の倭玉篇を國語資料として使用する場合には、慶長版（但し其の中でも初刊本である）を採る可きであり、元和版をば採るべきで無いと云ふ事も判明したのである。

元和版の本文の良否と云ふ事は認識できた。次ぎは、元和版は數種ある慶長版の中の何れを底本としたものであるかと云ふ事も、出來るならば明らかにして置きたい。そこで例により、使用し得る十五年有刊所本、無刊所本、十八年單刊記本と比較したところ、有刊所本を底本として其の本文を惡化せしめたと云ふやうな事實を示す例は全く無く、又單刊記本を底本としたと考へさせる證據も無いが、無刊所本との間には、

上卷

×（旁は呂）二三
（篇は身）オ七　ニ。無同上、有・單ミ

×三〇オ　ハナクチクリ。無同上、有・單ハナクチタリ（字形説明しにくき故述べず）
二ノ三

×（旁は莽）三一　カクソ。無同上、有・單カクス
（篇は目）ウ四

且三四　コ、ニ。無・有同上、單コン
ウ四

揣四四　ハビマル。無・單同上、有ハビニル
オ五

愚 六四 オ一　イカシ。無同上、有・單イヤシ

徴 七六 オ一　アキラカナラズ。無・有同上、單アナラカナラズ

衒 七七 ウ七　テナラウ。無同上、有・單テナソウ

畔 一二 オ二　ソムク。無・有同上、單ワムク

低 一四 オ六　タレタリ。無有同上、單タシタリ

亮 二二 オ五　ホガラカ。無・有同上、單ホガヲカ

見 三五 オ二　ラル、。無・有同上、單ヲル、

呀 三八 ウ七　アカラカマ。無同上、單アカラカス、有アカラサマとある可きもの

× (髟の下に眞) 四三 ウ一　クロカミ。無・有同上、單タロカミ

扣 四四 オ七　タ、ク。無・有同上、單ヌ、ク

下卷

× (旁は系 篇は畜) 五二 オ六　モチイル。無同上、有・單モチヰル

緣 四八 ウ七　ソキ。無同上、有・單ソチ

繚 五〇 オ一　イヨノ、。無同上、有・單イヨ〳〵

繹 五〇 ウ五　ヲ、イ、。無同上、有・單ヲ、イニ

底 一六〇 ウ一　ナンゾ。無・有同上、單トンソ

砌 一三 ウ四　ミギリ。無・有同上、單ミボノ

鵂 二八 ウ四　イカルカ。無・有同上、單クカルカ

鵲 二七ウ五　馬ノアラン。無馬ノアヲ（ラ歟）ン、有・單馬ノアヲ也

蚰 三六オ一　ナメクヂ。無・有同上、單ナメクヂリ

×（□の中に屯）六二ウ二　クラ。無・有同上、單クマノ

將 六六ウ五　ナン〳〵トス。無・有同上、單ナン〳〵トヌ

雅 三〇オ一　九訓ある中に有・單二本にはタシカ・カモの二訓があるのだが、其のカモはタシカの右下に、窮屈にやゝ小さく書かれて居るので、無本はカを除き、さかしらでタシカモとし、モを右旁へ寄せたが、元和本は完全にタシカモとしてしまつて居る。

の如き例が夥しく存するのである。自分の手許に在る元和本は、中卷の缺けて居る零本であるため、中卷は檢する事が出來ないが、上下二卷より推して、中卷も亦、上下二卷と同樣である事は確信できる。しかして右のやうな例が夥しいと云ふ事は、無論、元和本と無刊所本との關係の密接である事を明示するものであり、自分は、自分の手にしうる有・無・單の三本に就いて云へば、元和本の底本が無刊所本である事を斷言して支障無いと信じるのである。さて元和本が無刊所本から生れた事が判ると、其の生れた時期は、或ひは十八年本が未だ出ない時分の事では無かつたか、とも疑はれるのだが、飜刻の際に底本を選擇するのは自由であるべきだから、必ずしも、十八年本がまだ出來ては居なかつたから、と云ふ解釋のみが可能である譯では無い。やはり、すなほに元和頃の開版を認めて置く他は無いと思ふ。

一〇

室町期に和玉篇の類のよく行はれたらしい事は自分の既に說いたところであるが、和玉篇を著述する時の一樣式を示す古文書のあるのに氣づいたので、時代は古くは無いが左に記して見る。其の文書は大日本古文書、家わけ第九の

吉川家文書別集「西禪永興兩寺舊藏文書　貳」（昭和七年五月二十日刊）に見える吉川元長（元就孫、元春子、天正十五年六月五日死）の自書狀であつて、第六十八狀には、

此玉篇、手跡惡候て如何ニ候へども、假名を御付候て可レ被レ下候、必シモ自筆と存事にては無レ之候……十一月二十三日　元長

とあり、第一一八狀（仲冬廿日のもの）には

又玉篇新ク書せ申候、可レ進候間、ヨミ音ノカナヲ御付候て可レ給候、やがて可進之置候〳〵

と云ふ文句もあるのである。此の後の方のものゝ文句の上には、字形を□の形で示し、其の上方に「唐音」、右に「カン音」、左に「吳音」、下に「ヨミ」（ヨミの所には縱の棒線が三本引いてある。訓註は數個あるのが普通だから、其の事を示したのである）と註記して居る。何れも菩提寺の僧周伯に贈つた狀で年代は不詳であるが、第六十八狀は天正頃のものであるやうだ。さて是等の狀によると、元長は周伯に玉篇を書いてくれと依賴するに當り、假名を施す事だけをば周伯に賴み、假名を施す可き玉篇の本文は元長の手元で書かしめたのである事が判る。其の假名を施すと云ふのは、漢音・吳音・唐音の三音を註記する事、及び訓註を施すことであつたのだ。唐音までも註記して居る事は、聚分韻略（または三重韻）に唐音を墨書したものを往々に見るので興味深く感ずる。此の和玉篇が、會玉篇系統のものであつたか、中田本式のものであつたか、其の他のものであつたかなどと云ふ事は無論不明ではあるが、とにかく、此の文書によりて和玉篇述作の一樣式が窺ひ得るのは有難い事である。此の元長の書狀の中には、周伯に聚分韻略の假名註を依賴したものもある。やはり、興味深く感ずるのである。（他の書狀には節用集の述作を依賴するものもあり、其れも無論節用集史を補ふ可き貴重なものであるいから引用せない。さて其の節用集關係の書狀のある事は、畏友後藤丹治氏より教示せられた事であり、其れに因んで此の文書集か檢すると、玉篇や聚分韻略、さては略韻、太平記らに關する記事もある事に氣づいたのである。後藤氏の教示に對して深謝する）今は直接關係が無

（昭和十年十二月八日記）

一一

古典全集第五期は慶長版倭玉篇（但し普通のものであり、活字本では無い）を飜刻する豫定であつたから、成る可く慶長十五年の初刊本に據る可き事を正宗氏にも申して置いた事であつたが、途中になつて活字本（即ち自分の龍龕手鑑式活字和玉篇と呼ぶもの）の飜刻に變更せられたので、普通の本の飜刻よりは遙かに有意義であるから、私は非常に喜んで鶴首して居た次第である。ところで其の活字本和玉篇は、安田文庫所藏のものが底本とせられ、同文庫の川瀬一馬氏の解題を伴うて此の五月二十日に寫眞版で飜刻せられたのであるが、匡郭内八寸餘に五寸餘のものを、二寸七分に一寸八分程に縮寫したために、寫眞の不鮮明なると相ひまつて、假名字の註文が殆んど讀み難い程のものと成つて實用價値を大方失うてしまつたのは、斯う云ふ飜刻と云ふものは古典全集本がすでに存する以上は、別種のものが出ると云ふ事は殆んど無いのがつねであるので、實に惜しみても餘りある事である。何う考へても遺憾である。

さて川瀬氏の解題は十一頁のもので、一般の和玉篇を說き、さて活字本に及んで居る。

氏は寫本の和玉篇類を十二種擧げたが、「室町末期寫、三冊、安田文庫藏」とあるもの以外は既に紹介ずみのものである。此の安田文庫本は最近の購入であるらしい。篇目次第本「和玉篇」が見えないが、これが鎌倉期のものであると云ふ證據が無い以上は、是れも漏らす可きでは無からう。古訓玉篇や東井叟本は、まだ川瀬氏も所在を突きとめて居られないのである。早く發見して欲しいものである。

松井博士御所藏の類字韻一冊につき「室町末期寫」とし「慶長十五年刊本（○希云、十五年刊本と云つても、少くとも三種の異版があるのだが、此の十五年刊本とは何れ

の本を指すのであらうか は、類字韻と同系統の一本に基きて開版し、以後の整版本は何れも之に據りて重版せり」と云つて居られるが、是れによると、氏は類字韻を慶長版倭玉篇よりも古いものとせられるのである。そして自分の見るところは、此の拙文で述べたやうに正反對である。私も昭和四年度に博士の御本を見せて頂いたが其れは電覽的のものであり、昨年夏東大國語學研究室の影寫本で調査させて頂いた時も、僅か一時間足らずで極めて大ざつぱに、しかも部分的にところ〴〵を査べたのであり全冊を査べたのでは無いから、或ひは全冊を精査したらば、自說を取り消さねばならぬ事と成るかも知れない。但し現在のところでは、やはり川瀨氏の御說とは正反對である。

慶長十五年の有刊所本の刊記「……二王門町開板×」の×に當る文字を、川瀨氏は以前は「所與」の二字に讀まれたが今は又「爲」と讀んで居られる。果して何れが正しいのであらうか。

夢梅本玉篇「三冊」について、阿波國文庫、和田雲村氏舊藏の東洋文庫本、近頃完本と成つた安田文庫本（一冊づつの零本が完本と成つたのは本年の三月二十九日である（書誌學五月號二七頁））を擧げて居られるが、博搜の川瀨氏にしても僅かに三本しか所在をつきとめて居られない事を知り、此の本が活字和玉篇にも增した稀本であることを知つた次第である。だが幸な事には京都大學にも五冊本が存するのである。無窮會神習文庫にも五冊の完本があり、濱野知三郎先生も零本四冊（であつたやうに憶えて居るが）を祕藏して居られる事を付け加へて置く。（神習文庫のは未見、目錄による。（但し目錄に「梁顧野王」とあるは非。）

私は活字和玉篇に五段本と四段本のある事を、舊刻書目により指摘して置いたが其の後に成りて川瀨氏が段々と其れを實證せられた。氏はぼつ〴〵と其の所在をつきとめ、若しくは安田文庫に購入せしめて、今度の解題では

（一）五段組本　（イ）初版（安田文庫の完本、龜田氏の下卷零本。古典全集本は此の安田本の飜刻である。）

（ロ）再版（安田文庫の上中二卷零本、大槻家舊藏本）

（二）四段組本　（水戸彰考館の完本、安田文庫の完本）

の三種五部を擧げられたが、別に中島仁之助翁が四段組本の下卷を祕藏せられる事を附記せなければならぬ。此の本の事は支那撰述部首分類字書史概說下（本誌昭和十年二月號）にも言及して置いた　しかして此の中島翁の本は四段本と云つても、大部分が四段であると云ふだけであり五段の丁もかなりに存するし、又數行が六段・七段であるものも存する。又匡郭内は七寸二・三分に五寸六分位であるから、川瀨氏が匡郭内縱七寸、横五寸五分と云つて居られるのと小異がある。川瀨氏は彰考館や安田文庫の四段組本に五段・六段・七段の混在して居る事は全く言及して居られないが、若し眞に純粹の四段組本であるとすれば、中島氏本は川瀨氏指摘の本とも異るもので無ければならない。さらに又、川瀨氏は四段組本には五段組本同樣に版心に丁附けがある事を明記して居られるが、中島氏本には丁附が全然どこにも無いのである。して見ると是れらの相異より見て、中島氏本が川瀨氏指摘の本とはまた異るものである事を考へても可いやうである。斯う云ふ事は、兩本を突き合せたら直ぐ判る事だが其れは私には出來ない事だから、以上の事を記して、比較研究を容易に成し得る地位に居られる川瀨氏の研究を待たうと思ふ。（昭和十一年六月十七日校正の時に追記す）

類字韻は、他の松井博士の藏本の大部分と共に、今年に成りて、岩崎靜嘉堂文庫の藏に歸した。（九月二十一日記）